



巻 頭 言

対 等 と い う こ と

財団法人 日本植物調節剤研究協会 会長 千坂 英雄

農水省に在職していたある時期、研究機関の研究職の人事調整を担当していたことがあります。例えば、A氏を昇任させたその後任にB氏をあてる、その後に別の機関からC氏を配置換えする、つまり $A \leftarrow B \leftarrow C$ といった流れを作ること、これを「線引き」と呼んでいました。もちろん、すべての研究者の顔や能力を知っているわけではありませんので、基本的には関係する研究所の企画調整部長などの意向・意見を基に原案を作ることになります。そのあと、しかるべき手順を経て任命権者の決裁をえ、人事が成立しますが、研究所の意向通りに人事が成立したとき、しばしばその研究所の関係者から「ありがとうございました」と言われます。「こんにちは」と同じ日常の挨拶と受け止めればいいのかもしれませんが、ときに「お礼と言われるようなことをした覚えはない、もしかしてうまく口車に乗せられて、引くべきでない線を引いてしまったのでは？」という疑念に苛まれることがありました。

こんなことを思い出したのは除草剤の試験成績検討会の席で、コメントを求められたその剤の開発企業の方が、「ご試験ありがとうございました」と異口同音に発言されるのを聞いたときでした。この場合こそ「こんにちは」と同じことなのだと思います。しかし、若干の違和感を感じたことも確かで、これは決して私だけのことではないように思います。この違和感はどこから出てきているのでしょうか。

産・学・官が共同して技術開発に取り組む場合、各セクターの間には上下関係はもちろん、調整—被調整の関係もなく、それぞれが持ち分を生かして参画するという意味で対等の立場に

あります。植調協会の除草剤試験も委託試験の形をとってはいますが、本来的には共同技術開発です。私の経験からすると、たとえ委託試験といえども、その課題は試験担当者が自らの問題意識の中に消化して初めて実行できます。そうでなければ、試験研究者としてオリジナリティを失い自己否定になるからです。こうした気持ちが無意識のうちに頭の中にあり、お礼を言われることに何かザワザワとした違和感を感じているように思えます。

対等であるべきセクターとして、企業がなぜ「ご試験ありがとうございました」と発言することに象徴される心理状態・行動形態になるのか、あるいはならざるを得ないのか、これは決して単純な問題ではありません。ただ、少なくとも試験担当者に対しその琴線にふれる努力、例えば、その剤が効果・使いやすさなどのほか、とくに値段・環境負荷の点で何を狙っているのかを明示する努力が必要です。結果として狙いがはずれることもあるでしょうが、それが問題なのではなく、企業・公的機関それぞれの担当者が責任を背景にしながらも自由にものが言い合える、それが対等ということなのだと思います。人により価値観はさまざまです。本音でものを言い合って世の中が納まるわけではありませんから、そこに挨拶に代表される形式が意味を持って存在します。しかし、最初から形式だけがあるのではなくその裏に実質が存在してのことです。言葉じりをとらえるようですが、企業が「ご試験ありがとうございました」という心理状態から抜け出した社会を夢見ています。もちろん企業だけの責任ではありません。